



本読みの日々つらつら

本が好き！な、りなっこのダイアリーです。週末は旦那と食べ歩き。そちらの報告も。

プロフィール 自己紹介 夫と気ままな二人暮らしです。

https://blog.goo.ne.jp/rinakko_may/e/5be964fcd82b240cb95db315c8c0efd8

オルガ・トカルチュク、『逃亡派』 2014-02-28 18:47:30 | 読んだ・海外の小説

『逃亡派』の感想を少しばかり。

“この地球が喉につかえている。じっさい、咳ばらいして、ぺっと吐き出すこともできるはずだ。” 54 頁

楽しみにしていたオルガ・トカルチュク。やはり…というかまあ、不思議な小説でとても好みだった。始めはとりとめのなさに惑わされ、読みながら気持ちが漂い出しそうになる。でも、茫洋として掴みどころがないように見えて、116 もの断章をゆるゆると繋ぎ合わせていく“旅”と“移動”の主題は、いつしかこちら側をしっかりと掴んでいた。

隣り合う断章同士の不連続性(それこそ移動に酔う)、一つ一つばらばらに進んでいくプロットの奇妙な味わい。こんな形の旅もあるのか、これもまた一種の移動なのか…と、意表を突かれて幾度も思いを巡らしてみた。

例えば人体解剖学の進歩から、標本をよりよく保存する為の技術の話への流れがあり、両者の間を行き来しながら時代が下っていく。そして物体として切り刻まれていく人体と、複製されて朽ちない身体のことについて。他にも巡礼のこと、逃亡派のことも興味深かった。空間や時間では測ることの叶わない探求の旅について、全体を眺めつつ突き詰めていく思惟。…などなど、自在な広がり方は茸的なのかも知れない。

https://blog.goo.ne.jp/rinakko_may/e/a00c5b08a604ddb21fe7c5bd558dd6b0

オルガ・トカルチュク、『昼の家、夜の家』 2010-11-15 17:12:42 | 読んだ・海外の小説

とっておきな一冊になって、嬉しいばかり。『昼の家、夜の家』の感想を少しばかり。

“もしも人間でなかったら、わたしはキノコになりたい”——。ここで、この後に続く文章で、この作品の虜になった。しかもこの物語の語り手は、どんなキノコも食べてしまうのだ…！

隅々まで本当に好きだな…と、読みながらうっとり何度も思った。少し不思議なようで、何も不思議なことなどないのかも知れない、少し哀しいようで、本当は哀しいことではないのかも知れない、小さな町のそんなお話たちが色々にゆるゆると繋がっていく作風が、私にはしっかりと合うのだった。土地に埋もれた古い記憶や、町の人々が見た夜の夢の記憶が、まるで紗のようになって世界をやんわり包んでいるのも、幻想的でとても素敵だ。待ちわびていた慈雨に手を差し伸べる心地すらしつつ、つらな言葉たちがすとんと胸に落ちては素直に沁み渡っていく気持ちのよさに浸った。

ポーランドとチェコの国境地帯にある小さな町、ノヴァ・ルダ。どんなキノコも食すとさりりと言う語り手は、“うかつにも地下水脈の上に建てられていて、いまとなってはどうしようもない”家に、パートナーと共に移り住んだ作家である…らしい。彼女が紡ぎ出す文章からは、時に独特だけれど共感の持てる思惟があふれ、とりとめもない空想が広がっていく。どこかしらキノコにも似通った静の雰囲気をもと、風変わりな隣人マルガとの会話は、噛めば噛むほど…奥が深い。そして少しずつ差し挟まれている聖人伝にも、何とも言えない味わいがある。一応聖人伝としての体裁で書かれているのだが、たぶん教会側から見ると異教的なところがあって、そのはみ出し方が面白いと思った。

それから忘れてはならないのが…もちろんキノコ、である。滋味豊かでぷっくりとした姿も愛らしい、そのキノコのことで。美味しそう(?)なキノコ料理のレシピには大いに惹かれたものの、それ以上に、森の掃除屋さん…としてのキノコのことを思った。そのままでは土に帰ることが出来ない倒木や元生き物たちの骸を、地道に確実に分解してしまうキノコ。森の其処彼処に死が訪れた痕跡を、隠さんばかりにキノコが生える。によきによき生える。

死のイメージの隣には、こんなにもぴったりとキノコが寄り添うけれど、なんて優しくなんて静かな受容としてのそれだろうか。そしてそれはそのまま、この物語そのものを感じた印象でもある。家の形のような人の意識も、繰り返す死と再生の大きな輪っかも、果てしない夜の夢も昼の家も…全て、気負いなくありのままを抱きしめている。だから、沁み渡るのだ。

